第３学年　国語科の実践

１　単元名

「物語を読んで、音読発表会をしよう。」　　教材名『モチモチの木』　　筆者　斎藤隆介

２　単元目標

◎場面ごとの登場人物の行動や会話から、人物の気持ちや性格をとらえて読むことができる。
◎登場人物の人柄について叙述をもとに考え、友達と考えを伝え合うことができる。

３　ひびき合う子どもたちをめざすための指導の工夫

研究課題「切実な問題意識を持ち、友達とひびき合いながら学習する子どもの育成」
手立て…子どもの願いや思いを見とった単元構想と授業づくり
ブロックテーマ…追求する力、仲間と支え合う自分
・自分の問題をとことん追究する姿　・仲間と協働して追究する姿

【聴く・話す】の指導について

「聴く・話す」ことについては、意見を述べる際には「いいですか。」「聞いてください。」といった前置きをして、周りの友達が、聴く準備が整っているかを確認してから話し始めるように指導してきた。それらの前置きをすることはできるようになってきたが、周囲からの「いいです。」の反応が２～３名の分しかなかったり、「まだです。」と言っているのに話し始めてしまったりする児童もまだ少なからずいる。

また、聴くときには話す人の方を向く、手は下ろすといった聴き方の基本的な姿勢に立ち返る指導をしている。

【関わり合い・ひびき合い】の指導について

様々な学習の場面で、ペアやグループになって、自分の意見を話し合う活動を取り入れてきた。その中で、自分だけで考えたときには気付けなかった意見を聞いたときや、友達の考え方に納得できたときには、それをどんどん取り入れたり、自分の意見を変えたりしても良いことを伝えてきた。すると友達の発言に対して、「あぁ～。」「たしかに」といった相槌を打つ児童や、学習感想において「～さんの意見がいいと思った。」「わたしも～さんの考えと同じだと思った。」「ぼくの考えていたのはちがうと思った。」など、友達と自分の考えを比較してノートに書く児童が増えてきた。友達との関わり合いにおいて、ひびき合いの素地となる、友達の考えに対して柔軟であろうとする姿が定着してきている。

４　単元と指導について

①単元について

三年生での音読学習は、本単元が三度目である。一度目は最初の物語「きつつきの商売」で、少人数のグループに分かれて、クラス内で音読発表を行った。その学習では、声の大きさや句読点における間の空け方など、音読の基本的な事項に注意しながら互いに聴き合った。二度目の音読学習は、「三年とうげ」で行った。「三年とうげ」の学習は、本単元「モチモチの木」で対外的に音読発表を行う為の練習として位置づけた。ここでも前回同様、少人数のグループに分かれてクラス内で音読発表を行った。この学習で特に重きを置いたのは、叙述をもとに登場人物の心情を想像し、登場人物になりきって読む、ということである。そして三度目の音読学習が、本単元「モチモチの木」である。主観で物を言ったり、ある場面では豆太になりきったりする語り手によって進行する本作品は、これまでとは一線を画す、独特の雰囲気を持っている。登場人物のセリフはもとより、語り手による地の文からも、感情を読み取れる表現が多く見つけられる。児童は叙述から心情を読み取る練習をしてきたが、その読み取りの機会が豊富にあるのが本作品「モチモチの木」なのである。

また、語り手は冒頭で「全く、豆太ほどおくびょうなやつはない」という主観を持って豆太を登場させる。この印象は、夜中に一人で用を足しに行けないという、児童にとっても身近な体験と、小見出しの「おくびょう豆太」と相まって、読み手に強烈に印象づけられる。物語中盤、そんな豆太が痛さ、寒さ、怖さをはねのけて、一人でとうげ道を駆け下りる場面がある。ここで描かれるのは、大すきなじさまを死なせまいと、豆太が夢中で、必死で見せた勇気とやさしさである。この姿こそが、物

語の主題となる部分である。しかし、物語の結末は、またいつもどおりのおくびょうな豆太に戻ってしまった様子で締め括られる。

このように豆太は、その時々において多様な描き方をされている。これこそが本作品における重要なポイントである。叙述をもとに、部分部分の「心情」を読み取るだけでなく、それを総括して「人柄」を想像するという本単元において、この特徴は価値あるものだととらえることができる。

②指導について

【切実な問題について】

音読発表会に招待するのは、まだ「モチモチの木」の物語を知らないであろう１、２年生である。招待状には、日時や場所だけでなく、豆太とじさまの人物像を紹介する文を書く活動を取り入れる。招待状には何を書こうかという話をする段階で、１，２年生にとってより分かりやすい発表にするには何を書けばよいか、ということを問いかける。紹介文を書くことを含め、招待状に書くべき項目が一通り揃った時点で、教師が作った招待状のモデルを提示する。その招待状のモデルには絵本の挿絵を大きく取り入れ、児童がそこに自分の言葉を書き込みたいと思えるような物にした。さらに、登場人物を紹介することに切実な思いを持てるよう、音読発表会に向けて、何時間にもわたって音読の練習をする時間を確保した。自分達の音読に自信を持たせるためである。その自慢の発表をより楽しんでもらおう、物語をよりしっかり理解してもらおうと思えば、予め登場人物の人柄を紹介しておくことにも必然性が生まれる。

本時に先んじて、児童一人ひとりが、豆太の人柄を考える活動を行う。その活動にはワークシートを用意し、端的な言葉で豆太の人柄を表せるようにする。そうすることで、個々の考えたことの相違点が見つけやすくなると考える。

【ひびき合いについて】

ひびき合う子どもたちを目指すために、ひびき合える土壌づくりを行っている。一人ひとりが自分自身の考えを持った上で、友達と関わり合い、話し合ったことで、それまで一人ではたどりつけなかった考えにたどりつける。そんな学習経験を積み重ねてきている。

本時においては、座席表を活用し、互いの考えを視覚的に確認しながら話し合えるようにする。また、全体で行う意見の交換の流れを、これまでの読みを書き込んだ本文の拡大コピーと板書で整理することで、考えの一助としたい。その後、ペアで話し合い、自分の思いを大切にしながら、友達の考えも受け入れ、「〇〇さんの考えがいいと思ったから付け加えたい。」「〇〇さんの考えを聞いて、自分のはちがうと思った。」「ぼくと〇〇さんが似ていると思った。」と心の変容が起きた時をひびき合いの姿としたい。

5　単元構想　第3学年　国語科の実践　（全１５時間）

単元目標	◎場面ごとの登場人物の行動や会話から、人物の気持ちや性格をとらえて読むことができる。 ◎登場人物の人柄について叙述をもとに考え、友達と考えを伝え合うことができる。

単元導入前の学習…「きつつきの商売」「三年とうげ」では、音読発表会を行い、互いに感想を伝え合った。また３年生の最後の物語単元「モチモチの木」で、６年生と保護者に音読発表を聞いてもらおうということになった。

三年とうげの音読会を終えて

・楽しかった！　・終わってほっとした。　・次の「モチモチの木」はもっとうまく読みたい。・次は本当に発表するんだよね。　・上手に音読したい。

○音読発表会のやり方を考えよう。①

・役割決めよう！　・その前に練習しなきゃだめじゃん。　・気持ちを考えないと練習できないよ。
・来てもらうのに招待状作んないと！　・でも６年生ってこの話もう知ってるんじゃないの？
・１、２年生なら知らないんじゃない？　・最初は話を読みたい。　・そのあと役割を決めたい！
・三年とうげのときは先に気持ちを考えたよ。　・先生読んでよ！　・１回自分でモチモチの木を読みたい。

【指導事項】学習の見通し
学習の見通しが持てるよう、子どもと対話しながら、音読発表会に必要な事項を列挙していく。

○「モチモチの木」を読んでみよう。②

・１回読んだからチーム決めしたい　・早く役割分担しよう！　・前の「三年とうげ」のときは初めに丸読みしたよ。
・１回みんなで丸読みしたい。　・三年とうげのときは一回丸読みしてからせりふに線引いて気持ち考えたよ。

【指導事項】導入
児童の黙読の後範読を行い、これまでの物語単元同様、読めない漢字、意味のわからない言葉を確認する。その後、「三年とうげ」の学習の流れを想起させる問い返しをする。

○みんなで丸読みしよう。①

・○○さんが上手だった。　・△△さんが、気持ちを込めて読んでたよ。　・でも△△さんが読んだのってナレーターだよ？
・ナレーターだって気持ち込めて読めんじゃん。　・「三年とうげ」のときより、ナレーターに気持ちを込めるところがたくさんあるよ。
・何かナレーターの言葉遣いおかしくない？　・次も前みたいにセリフのところに線引いて考えればいいんじゃない？

【指導事項】「語り手」の存在について
この単元においては、物語は主観の入った見方をしている「語り手」によって進められていくことをおさえておく。

○登場人物のセリフの読み方を考えよう。⑤

○おくびょう豆太（一の場面）
・モチモチの木をこわがってるから、**小さい声**で読んだらいい。　・語り手はあきれてる感じだ。
・じさまは豆太にやさしいから、**ゆっくり**読むといいと思う。

○やい、木ぃ（二の場面）
・いばってるところは**大きい声で強く**読めばいいな。　・ここでもじさまは**やさしい声**がいいと思う。
・語り手はやっぱり**あきれてる言い方**で読む感じがいい。

○霜月二十日のばん（三の場面）
・豆太は泣きそうだから、**小さくてふるえるような声**だ。・語り手もこわがってるから、**豆太みたいな声**がいいと思う。
・**じさまはちょっと強い言い方をしてる**から**大きい声**で読むといいんじゃないかな

○豆太は見た（四の場面）
・くまをこわがってるから**小さい声**がいいね。　・でもびっくりしてるし**大きい声**でしょ。
・１回目より２回目の方がじさまを呼ぶ声は**大きい**と思う。
・１回目はこわがった言い方だけど、２回目はびっくりした感じだよ。
・「医者様をよばなくっちゃ」は、**大きい声で強く**読んだ方がいいんじゃない？
・じさまはたたみにころげるくらいいたがってるから**苦しみながら**言わないと。

○弱虫でも、やさしけりゃ（五の場面）
・結局またこわがってるから、小さい声で言う。
・じさまは元気になったし、豆太ががんばったのがうれしいから、**笑うときは大きい声**がいいと思う。
・じさまは豆太に自信を持ってほしかったんじゃない？

【指導事項】読み方の工夫
読み方の工夫を考える際は、根拠となる叙述を探すよう指導する。
物語冒頭から「霜月二十日の晩（三の場面）にいたるまでの豆太の心情を読み取っていく中で、豆太がじさまに甘えきっているということに気づかせたい。そのために、子どもの読み取った、豆太の心情に関する発言を十分に引き出す。またそれをあとからでも振り返れるよう、教室内の見やすいところに掲示していく。

【指導事項】「じさまぁっ。」と「じさまっ。」
後に豆太の紹介文を考える上で、重要な場面である。じさまを呼ぶ際の豆太の心情の違いに気付けるよう、子どもがそれぞれのセリフから読み取った心情を十分に引き出す。またそれらを対比し、それらの違いを読み方の工夫に反映させていく。

【指導事項】じさまの豆太への想い
豆太の人物像を表す、「勇気のある子ども」「やさしさ」という言葉に着目させる。そのために、児童の読み取り十分に引き出していく。

・気持ちは考えたからもう練習したい！　・その前に役割決めなくちゃいけないよ。
・やっぱり練習したらそのあとすぐ発表した方がいい。　・練習した後に招待状作ってたら、練習したこと忘れちゃうもん。

○招待状を作ろう。⑤

・ねぇ早く招待状作ろう！　・招待状って何書くの？　・日付が分かればいいと思う。
・時間と場所も分かんないとだめじゃん。
・低学年だから、あらすじとか登場人物も少しわかってた方がいいんじゃない？

【指導事項】招待状
招待客に渡す招待状を一人一枚作る。そこに書く登場人物の紹介文を、一人一人が考えて書くことを強調する。そうすることで、その後の活動への切実感につないでいく。招待状に児童が書き込むのは、登場人物の紹介文のみとする。

招待状の作成と同時進行で、音読発表会に向けて音読の練習を行う。（総合⑤）

登場人物を紹介する文を考えよう。（1/5）

豆太	じさま
・木をこわがる子　・勇気がある ・弱虫　・やさしい子 ・おくびょう	・豆太にやさしい　・きもすけ

【指導事項】豆太の人柄
豆太の紹介文については、豆太を弱虫と見る「負」の要素と、勇気があると見る「正」の要素が出てくると予想される。それぞれの意見を述べる際、常に根拠となる叙述を探すよう指導する。また紹介文とそう考えた根拠を書き込めるワークシートを用いる。また児童がその両方の要素を紹介文に組み込めるよう、どちらの要素についても、児童から十分に意見を引き出す。

豆太はどんな子だろう。（2/5、3/5本時）

・はじめにおくびょう豆太って書いてあるからおくびょうだよ。　・ただの木をこわがってるからこわがりだと思う。
・一人でせっちんにいけないんだからこわがりだし弱虫だ。　・でもじさまのために一人で、真夜中に、医者様をよびにいけたんだから弱虫じゃないよ。
・モチモチの木に灯がついたのを見られたんだから、豆太は勇気のある子どもだったんだよ。　・最後にはまた木をこわがってるから結局はこわがりだよ。
・こわがりなのはそうだけど、じさまのためにがんばったんだから勇気を持ってるし、やさしい子だと思う。・最後にじさまも、やさしささえあればって言ってるよ。
・豆太のこと考えたら次はじさまの紹介文考えようよ。

じさまはどんな人だろう。（4/5）

・豆太のために夜中でも起きてくれるからやさしいよ。　・６４歳だけど岩から岩へのとびうつりができるから、元気でどきょうがあるよ。

招待状に人物紹介を書いてみよう。（5/5）

・どうやって書けばいいの？　・豆太とじさまがどんな人かってって考えたじゃん　・豆太はこわがりだけど勇気があるって書いていい？
・もう次は音読発表会？　・なんかドキドキしてきた！

○音読発表会をしよう。①

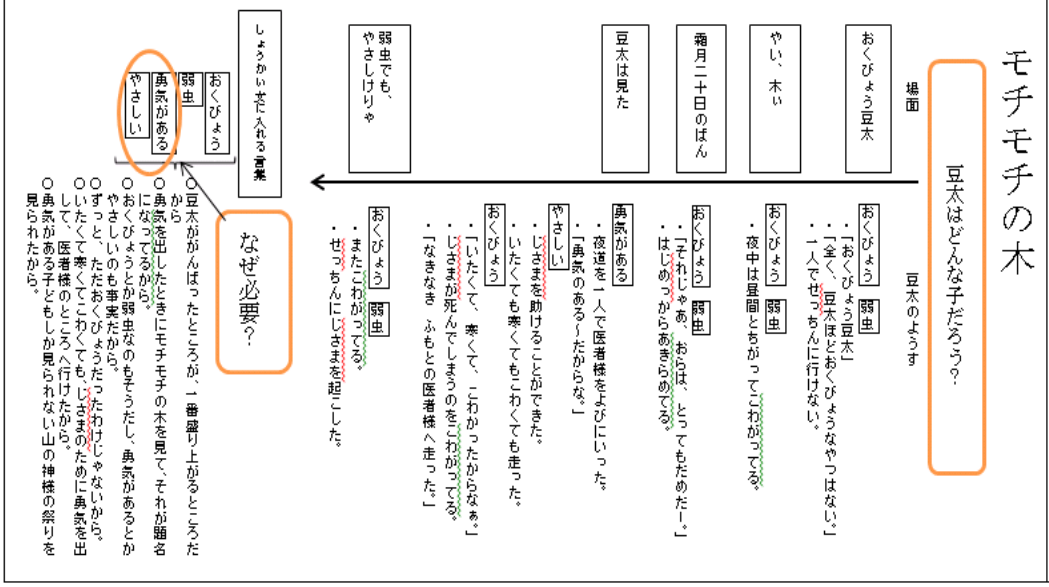
・上手にできるかな。　・きんちょうするね！　・楽しかったって言ってもらえたらいいな。

6　本時について

本時について　　３年３組「物語を読んで、音読発表会をしよう。

（1）　本時目標　登場人物の人柄について叙述をもとに考え、友達と考えを伝え合うことができる。

（2）　本時展開

学習活動	○主な支援・留意点　★評価【観点】
	○考えに自信を持てるよう、個々の考えを認める。 ○人柄を表す単語を全員が共通理解できるよう、豆太の人柄を表す単語が出る度にその根拠を明確にする。 ○考えに困る様子であればペアトークの時間を設け、考えを深める時間をとる。 ○子どもたちが何について話し合えばよいかを明確にする。 ★理由を明らかにして、自分の考えを友達に話すができる。【話す・聞く】 ★話し合いを通して、登場人物の人柄についての読みを深めることができる。【読む】

7　実践を終えて

①　単元をどのように作ってきたか

学年最後の物語の学習は、他のクラスや保護者の人に音読を聞いてもらいたい、というところから始まった。この子どもたちの思いは、４月からの音読の学習を通してそだってきたものである。学年初めの物語「きつつきの商売」ではグループに分かれて、クラス内だけでの音読発表会を行った。また直前の物語「三年とうげ」では、ただ音読するだけでなく、「登場人物の気持ちになりきって読む」ことに重きを置いた。本文の叙述から登場人物の気持ちを読み取り、声量や話す速さ、声色を変えることで、それを表す練習をした。

モチモチの木の学習に入ってからは、最後の音読発表会を意識して子どもたちと学習の計画を立てた。「音読発表会をするためには何が必要か。」と子どもたちに聞くと、次のような意見が出された。「練習、チーム分け、登場人物の心情の読み取り、招待状作り」などである。それらを行う順番を話し合ったものが、単元の流れとなった。

②　本時の課題が子どもの切実な課題となったか。

本時では、発問を「『勇気がある』は、豆太の紹介文に必要か。」としたことで、話し合いの争点がねらいとずれてしまい、教師が考えさせたかったことを十分に考えさせることができなかった。しかし翌日、教師からではなく、子どもの方から「昨日の、豆太がどんな子かって話の続きしたい！」と声が上がった。教師がどうしようか考えている間に、子どもたちは「豆太はどんな子なのか」という課題に対する各々の意見を交換し始めた。こうして子どもが課題についての話し合いを望んだことや自発的に意見を交換し始めたことから、本時の課題は子どもにとって切実なものになっていたと考えられる。

③　ひびき合いにより本時の子どもの変容はあったか。

本時以前は、豆太の人物像を「おくびょう」や「弱虫」と、豆太をある一面でしかとらえられなかった子が多くいた。しかし本時の話し合いを経て、豆太の人柄が「おくびょうだけど、いざというときは勇気を出せる、優しい子。」という言葉にまとまると、クラスの大多数の子が、「それをそのまま招待状に書きたい。」と考えるようになった。

友達の意見を取り入れ、今までの自分の考えよりも良いものにたどり着くことができた。この姿こそ、ひびき合いの一つの姿であると考える。

④　成果と課題

成果　子どもの見とり

課題もしくは友達の考えに対し、子どもたちがどのように反応するか、その具体的な姿を想像しながら、単元の流れや本時の流れを作った。その結果、課題は子どもにとって切実なものとなり、結果的にはひびき合う姿も見ることができた。普段の子どもたちの姿からの見とりがあったからこそのものである。

課題　話し合いの中で焦点化するべきポイントの見極め

本時では「豆太がどんな子なのか」を考えさせたかったのに、実際には「豆太を紹介する文には何を書くか」を考えさせてしまっていた。そのため、話し合う子どもたちの間に、食い違いが生じてしまっていた。

豆太は「勇気がある。」と、豆太は「勇気が出せる。」のちがいは、豆太の人柄を正確にとらえるきっかけとなる“ずれ”である。次時ではその言葉のずれに気付くことで、話し合いを焦点化できた。焦点をどこにあててひびき合うのかを見極めることが課題である。